

編集後記

2024年度の論集は青木三郎教授、ならびに増尾弘美教授の退職記念号である。こうして無事に発行することができ一先ず安堵しているものの、形容しがたい寂しさを覚えるのは私だけではあるまい。両領袖が定年を迎え、この大学を去ってしまうことなど誰が想像していただろうか。

発行に際しては多くの方にご協力いただいた。まず、執筆者の方々にお礼を申し上げたい。思い出に関する文章なども含め、例年よりもさらなるご投稿を賜ることができ、極めて充実した内容になった。また、論文を募集するにあたって渡邊淳也先生と小川美登里先生、宮腰駿氏にもお世話になった。この場を借りてお礼申し上げる次第である。そして、論集のみならず本研究会の存続は会員の方あつてのことである。皆様からは常日頃からご支援いただき感謝の念に堪えない。今後とも本研究会を支えていただければ幸甚である。

また、パリ第三大学名誉教授のミレイユ・カル＝グリユベール先生にもご寄稿いただき、本号にささやかな花を添えることが叶った。今回は2008年以来、16年ぶりにお越しいただき、2024年11月14日に「批評行為とは何か」というタイトルでご講演いただいた。批評とは何よりもテキストに寄り添う行為であり、テキストとともに、言語の、思考の、そして世界の不確かさを噛み締めつつも、その唯一無二の経験を共有するための自由を維持する闘いであるというお話が印象的であり、講演後の聴衆の反応からも興奮を感じ取れる熱弁であった。それは、単に教授が20世紀フランス文学を代表する批評家のひとりであるだけでなく、講演でも言及された思想家や作家—デリダ、シモン、ハントケ、ビュートルなど—を近くでもっともよく知る人物でもあったからであろう。ミレイユ先生は小川准教授が主宰する共同研究およびリサーチユニット「近現代の批判的分析研究／Laboratoire d'analyse critique des modernités」のメンバーであり、その縁から本号への掲載の運びとなったことを、この場を借りてご報告する。

ここで少し個人的な話をするをお許しいただきたい。私が青木先生に初めてお会いしたのは2020年の研究会のことで、言語学がご専門にもかかわらず、私の研究対象であるナタリー・サロートや現代文学にも造詣が深かったことに驚かされ、その後も研究会等において数々の有益なご指摘を頂いた。人文社会学系棟の廊下で偶然お会いしたときなどは軽妙な語り口で励ましていただき、大いに勇気づけられたものだ。改めて厚くお礼申し上げる。そして、私は増尾先生の最後の教え子であった。大学院の入試説明会でお会いしてから現在に至るまでお世話になり、私の研究というのは増尾先生なくしては進展しえなかった。研究

室で、時には寛容に、時には鋭い助言をいただきつつ、他にも人生観など数えきれないほど多くのお話をさせていただいた。若輩である私が両教授との知己を得たのはここ 5 年ほどの話であるにもかかわらず、しかしその時間は非常に密度が濃く、貴重なものであった。増尾先生の在職中に博士論文をお見せできなかったことだけが心残りである。

さて、ご存知の方もいるように、現在の筑波大学大学院に厳密にはフランス語・フランス文学専攻というものは存在していない。最小単位は言語学、文学サブプログラムなる組織に変化し、我々の古典的な存在意義は解体され、転換を迫られている。人文学が危機に陥っているというのはもはや紋切型となっているが、しかしますますその状況は深刻になっており、極めて残念なことに、人文学という学問はそれ自体で成立するものではなくなってしまった。だが、今こそ彼らからの教えを胸に我々は言語・文学研究の意義を常に問い続けなければならない。直接目には見えずとも、確かに存在する人間のダイナミズムを明るみに出し、世間に問わなければ、いつかこれらのサブプログラムも消滅するだろう。

青木三郎教授、増尾弘美教授は大学という場を後にすることになるが、しかし今後も研究的実践を継続されることと思われる。その行く末を見届けつつ、本論集を両先生に捧げたい。

編集委員